

浄土

七月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一冊一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別郵便)第三五二号
昭和三十七年六月二十五日 印刷 昭和三十七年七月一日発行

第二十八卷

第七号

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町一ノ二二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

大日方大乘著

B六判上製

三〇二頁

定価四三〇円

千八〇

仏教衛生学

現代人の必読書

本書は衣・食・住・水・中毒の五項目にわたり、医学的見地より仏教資料を充分に駆使し、新しい分野を開拓している。人は健全な肉体と康安な精神とをもってはじめて健康であり、幸福の源泉があるのだ。ここに現代医学の学ぶべきところがある。

本書を忠実に活用してこそ仏教を現代に生かすことになる。

大日方大乘著

B六判上製三一二頁

仏教医学

定価三五〇円千八〇円

三幸出版社

東京都千代田区
飯田町 1 の21

浄土

七月号

されば念仏を信じて往生をねがふ人は、こ
とさらに悪魔をはらはんために、よろづのほ
とけかみにいのりをもし、つゝしみをもする
事は、なじかはあるべき。

法然上人御法語



中央アジア・トルファン（高昌）で発見された手の塑像断片。我国の木心乾漆像に似た作り方をしている。

浄土 七月号 目次

表紙 不動明王像（京都・東寺）

「和順」の意味するもの……………岸 信 宏……………(2)

季節の法話 うらぼん……………佐藤 良智……………(6)

紀行文 アメリカ旅行……………佐藤 治子……………(10)

随 筆 亀と名号……………村田 嘉久子……………(16)

ボーイスカウトと宗教教育……………内山 憲尚……………(18)

近代高僧伝 颯田諦真……………大橋 俊雄……………(22)

念仏入門……………藤井 実応……………(24)

扉の御法語……………(32) 参議院選挙……………(9)

表紙の写真……………(15) みたまよ永遠に……………(28)

——特集—— 新浄土宗に望むもの……………(29)



「和順」の意味するもの

岸 信 宏

(総本山知恩院 門主)

さきほどの第二次世界大戦争が終りをつげますと、我が国の状況も急激に変化してまいりまして、あらゆる方面に自由と解放とが叫ばれるようになりました。我が浄土宗門におきまして、宗門の運営があまりにも政治的に傾いているのを憂うる人々が、信仰を中心にした僧俗一体の、民主的な宗団としたい念願のもとに、祖山知恩院を中心として新らしい宗団をつくり、一宗に呼びかけたのであります。しかし現実の制約は直ちにその理想を実現することができず、宗門は二つの宗団に分れてしまったのであります。しかしその教義や伝統を同じくしている宗団がいつまでも二つに分れているということは望ましいことではありませぬ。いつしか再び合同をして、新らしい時代に適応した一つの宗門として、発足し得る日を望む声がだんだんと大きくなって来たのであります。両宗団から合同に関する委員が選出せられ、幾多の曲折を経たのでありますが、昭和三十六年の三月に元祖大師法然上人の七百五十年の御遠忌を迎えるまでに、合同の実現を見たいものと、関係当局の努力が続けられたのであります。不幸に



してそれまでに合同の手続きを完了することができなかつたのであります。しかし御遠忌は両宗団共修の形で行われたのであります。合同の手続きは幸にも御遠忌の歳を記念して昭和三十三年の暮十二月二十三日に合同認証の申請書を文部省へ提出する運びとなつたのであります。認証は本年の三月二十七日に交付せられ、登記は法然上人の御生誕の佳き日である四月七日に行われ、ここに合同の手続きの完了を見たのであります。一宗の伝統は不滅のものであります。宗教法人法に定むる手続きによる新しい浄土宗が発足したわけであります。分裂以来十五年、その間宗門の内外に多大の御迷惑と御心配をおかけしたことをふかくおわびいたします。

このたびの御遠忌を機縁として、浄土両宗団の合同の実現を見ることのできましたことは、一に宗門を挙げての和衷協力精神によるものであります。そのことに就て私共宗門人の肝に銘じなければならぬことは、このたびの御遠忌の直前、即ち昭和三十六年の二月二十七日に、今上陛下より法然上人に対して、和順大師という大師号の御宣下のことでありました。上人に対する大師号の御宣下はこれで七回目であります。その初めは上人の入滅四百八十六年目に当る元祿十年正月十八日に、東山天皇より円光大師という大師号が御宣下になり、その後十四年たちました五百年の御遠忌に、中御門天皇より東漸大師という大師号が重ねて御宣下になつたのであります。それが例となりまして、五十年目毎に行われる御遠忌法要ごとに、時の天皇より、大師号が加えて御宣下になり、懋成、弘覚、慈教と大師号が重なり、明治四十四年の七百年の御遠忌には、明治天皇より明照大師という大師号が御宣下になつたのであります。その当時私は宗教大学に在学中でありましたが、その大師号をお受して宮中より退下せられる知恩院第七十九世山下現有上人の御一行を二重橋のほとりにお迎えをした感激は今なお新たなるものがあります。このたび七百五十年の御遠忌に際して、今上陛下より重ねて大師号御



宣下の内命を受けて、私は知恩院第八十三世の身をもって、昭和三十六年二月二十七日、宮中に参内し、宮内庁の宇佐美長官より、東の間に於て、和順大師という大師号記入の陛下の詔書と香華料とを拝受して退下し、直ちに知恩院に帰山し、大師の影前に御報告申し上げ、三月一日より七日までの大法要を修行したのであります。このたびの御遠忌を機縁として浄土両宗団の合同の実現を見ることのできましたのも、これ全く宗門人の和順の精神の現われでありまして、感激にたえない次第であります。

法然上人の七つの大師号はいずれも上人の徳をたたえた言葉であります。その中でも私は特に円光、明照、和順と続けてお呼びする時に、仏様の円かなる光の、明らかに照らすところ、おのずから和順の世界が現われると解釈いたしまして、そこに深い宗教的感激と現代的意義とを感じるものであります。

この和順という言葉は浄土三部経の中の無量寿経の下巻に出ております。即ち「仏の遊履するところの国邑丘聚、化を蒙らずということなし。天下和順し、日月清明なり。風雨、時を以てして、災厲起らず。国豊かに民安くして、兵戈用ゆることなし。徳を崇め仁を興して、務めて礼讓を修す」というのであります。仏のお出ましになるところには、こういう平和なる世界が現われるというのであります。仏がお出ましになるところには、仏を信ずる人々、必らず和順の世界が現われるのであります。その和順の世界とは平和なる心をもって正しき教に順い、混乱のない、秩序のある世界を建設することでありまして、

また孝経の初めにも、和順という熟語にはなってはいませぬが、人倫の大本たる孝道は和にして順なるところにあるという意味がのべられています。いわば仏教の理想とするところも、儒教の目的とするところも、和順の世界を建設するところにあるということができるのであり



まして、東洋思想の根幹をなしているのです。この和の精神は仏教の僧伽の思想でありまして、仏、法、僧の三宝の一であります。三宝の思想をもって仏教を我が国に受容せられたのが聖徳太子であります。当時物部、蘇我など氏を中心とした派閥の抗争の激しかった時代に仏教が渡来したのでありますが、この仏教の理想とする和の精神、三宝の思想によって、国内の派閥抗争を解除し、民心の安定を計り、真の平和の国家を建設しようとせられたのが聖徳太子であります。太子は十七条の憲法を制定して、政治の基本とせられたのであります。その第一条には先ず初めに「和を以て貴しと為す」とのべられて、国内派閥の抗争を止むべきを示され、その方法として、第二条に「篤く三宝を敬え」と仰せになったのであります。そうしてこの三宝の教をば「四生の終帰にして、万国の極宗なり、何れの世、何れの人か、この法を貴ばざらんや」とのべてあります。あらゆる時代を通じ、すべての国を越えて、いずこの民族にも受け容れられるのがこの三宝の教、仏陀の教であります。三宝の中心は仏陀にあります。その仏陀を念じて、我もまた仏陀の境界に進もうとするのが念仏の教であります。その念仏の教をば口称念仏の修行によって万人救済の教を説き示されたのが法然上人のおすすめであります。現代の社会の状況、国際の関係は平和と自由とを念願するあらゆる民族の希望があるにもかかわらず、世界の二大陣営、共産圏と自由圏との抗争があらゆる方面に反映して、争いと闘いの様相がますます深刻になろうとしています。この時に当って万人の進むべき正しき道を念仏の教によって示された法然上人に対して、今上陛下より和順という大師号の宣下のあったことに深い現代的意義を感じます。殊に戦後新しい憲法に於て戦争の放棄を世界に宣言した我が国は、正しい教に順って、混乱のない、秩序のある、平和国家を建設してゆくことが、世界に対する我が国民の責務であると信じます。

わが祖師にくだしたまへるおくり名の和順の世界ひらけとぞおもふ。

う ら ぼ ん

佐 藤 良 智

(大正大学文学博士)



ある文化なり、宗教なりが、一つの民族の血のなかに流れこみ、その民族を内からそだててゆくということは並大抵のことではない。仏教は日本人の血の流れのなかにとけこんでこの民族を内から育てて行った典型的な例とみる事ができよう。

そのなかでも、盂蘭盆 (ullambana) 会ほど仏教行事として広く、深く行われているものはすくないだろう。

よく、「盆と正月が一度にきたようだ」ということばが使われる。これはごく平凡な日常語とさえなっている。このことばだけでみると、正月よりも盆の方が、強いとさえみられる。それはとにかく、「おぼん」は日本人にとって本当にそ

の血となり、肉となって、とけこんでいる仏教の思想である。その根源は「盂蘭盆経」に由来していることは人の知るところです。この経の根本の思想は仏教の本来の思想に深く触れているというよりも、印度古来の農耕社会に行われた祖先崇拜に基くところが多いのではないかと既に学者のいうところです。しかし、仏教の報恩の思想、引いては縁起の思想に深くつながるものがあることは否むことができない。この祖先崇拜の東洋的色彩の強い考えは、わがくにとっても無縁ではない。無縁どころか、日本の習俗の中央にドッシリと腰をすえているのであります。「うらぼん経」の考えを日本人本来の血の中にもっているのです。言はば同質の血が一

つに融け合ったわけです。本来、素朴な単純な血が、仏教という深遠な教えとまじることによって、より純潔に、より深化され、民族の尊い血となって人々のところを育てあげたのであります。このように既に民族の血となって流れているもののように既に民族の血となって流れているものは外貌は変化することがあっても、将来も日本民族と共に流れて行くでしょう。それだけに、その純粹の分を更に純化し、時代化して行かなければならないと思います。

さて、それならば、「うらぼん経」のなかにはどのようなことが書かれ、そのなかのどのようなことが日本の「お盆」とつながりを持っているのであろうか。

經典の語るところによろう。

お釈迦さまに目連という大弟子がありました。この方が立派に修行をお積みになり、六神通というよう大きな力を得られました。目連さまは、自分を産み養って下さった母親に御恩報いをしようとて、その力でごらんになるとどうしたことでしよう。自分の母親は餓鬼道に堕ちて、さかさにつりさげられたような苦しみを受けて居られるではありませんか。

目連さまは、仰天し、悲しさで一杯。なにをさし置いてお釈迦さまにこのことを申しあげ、私は一体どうしたら、わたくしの大切な母親を安楽にすることができでしようか、と尋ね

ました。そこでお釈迦さまは、七月の十五日の大切な日に、七世の父母、現在父母のため百味の飯食を盆につけ、十方の大徳たちにご供養なさい、と申された。そこで目連さまはその通りにいたしました。その母親は餓鬼の苦しみを抜け得ることができました。更に続けて釈尊は申されました。現在の父母及び、過去七世の父、母のために、七月十五日に百味の御馳走を血僧に供養するがよい。そうすれば、現在の父母をして寿命百年、而かも無病ならしめ、更に七世の父母を人天界に生ぜしめることができるであらうと。

これが經典の主たる部分である。

これが一つの「うらぼん会」という宗教行事として、中国、日本に広く行われるようになった。中国では梁の武帝の時（西紀五三八）に同泰寺というお寺で行われたのが最初であると史書は伝えている。又、唐の初め頃盛んに官民の間で行われたとも伝えている。わがくにでは、推古時代（十五年七月十五日）に「寺毎に四月八日（降誕会）七月十五日に行事を行った」ということが日本書紀に出ているということであるから、丁度、七世紀の初め頃にあたり随分古いころから行われていたわけである。

その後、斉明帝の時に、飛鳥寺に、須弥山（しゅみせん）の像を設けて「うらぼん会」が行われたという。又続日本紀に

は天平五年には宮中うらぼん会が行われ大膳にうらぼん供養を備えしめたと言われるから、随分大がかりな「お盆」の行事が宮中に行われたわけである。その様子なども伝えているが天皇もこれを拝したと記されている。民間の寺院が広くこれを行ったことは言う迄もなく、三界の万霊を供養したのである。在家にあっても盆棚等を行って盛んに行った。今日も尚一般に行われ、十三日の夕にお精霊さまが迎え火にしたがってそのかつて日々生活したわが家に帰り、供養をうけて十五日夕その現在のすみかに帰って行くものと信じられてゐる。わたくしも、父親がみ仏のみに帰られた翌年の新盆を行ったが、本当に杖をひきながら玄関をはいつてこられたような生々しい実感を得た経験がある。親を思う切ない子のあわれさであろう。しかし、尊い心持ちだ。

前にも申したように「お盆」はお正月と並んで日本的ななつかしい行事だ。現今は西欧の風習も漸次日本に入ってきているが、本当に地についたものになるには尚多くの年を必要としよう。お盆の行事は本来の農耕儀礼と結びついた季節祭りでもあるので、その根は非常に深いと思われる。そしてこのように深く根ざした習俗は、その意味を充分に握みとり、民族の文化を向上させ、血を純化して行く力としなければならぬ。

近代文化は人間喪失の時代であると言われる。機械と組織の廻転によって社会は動いている。その間に生きた人間がはさまれてうごめいているのが現代の世相であると言はれる。かぎられた世界にだけ、人間があつて大部分の人は人間を失いがちであります。このような時代にあつても、あたたかい血のなかにあつて、内からこれをあたためてくれるのは古来からの民族の習俗です。民謡というような歌句の世界にあつても、理屈を越えてなにかあたたかいものを感じさせます。

祖先崇拜のなかに私共ははかり知れない血のあたたかさを感じとるのです。そのなかには時を超えて人間を感じとるのです。人間喪失の時代にあつて人間を獲得するのです。父母の育てのみ恵みを感謝することは、やがてもう一つ大きな私共のいのちの大親であるみだぶつのみ恵みを知り、これを感じ謝することになります。感謝の心持は人間の中にのみあります。感謝の心持ちのなかにお盆の本当の意味があります。世界の平和もこのなかに育くまれます。

「お盆」のお祭りをもつと小供に親しいものにしなければならぬと思います。「お盆」を盛んにすることによって人間お互の温かさを増すと共に、家庭のなかに感謝の気持を植えつけ、私共には人間を超えて大きなみ力のうごいていることを知ることができます。これが人の進歩のいしずえともな

ります。深い社会連帯の尊さも知ることができます。最も要求されている今の日本の社会倫理も達成することができま
す。

私共は一層高い「お盆のまつり」を盛んにしこのくにの豊
かさをましたいものと思います。

× × × × × × × ×

事務所移転のお知らせ

法然上人讃仰会・「浄土」編集部事務所は、左記の如く移転致しま
す。今後ともよろしくお願い申し上げます。

新住所

東京都千代田区飯田町一―二一

法然上人讃仰会

「浄土」編集部

参議院選挙

今月一日も参院選挙によって、新議員が生
れる。参院の特色はなんといってもその性質
上、宗教関係者の立候補が目立ち、全国の組
織を利用し、他の大政党と対立が激化してい
る。以下、全国区の宗教関係者の名をみるこ
とによって、誰が選ばれるか、選ばれたかを
再検討してみよう（資料は朝日新聞による）

自民党からは、立正佼成会から長谷川仁（
産経論説委員・新）、川野三曉（西本願寺派
総務・新）、天台宗僧職にある今井祐申（新）

真言宗布教師の安部法俊（新）、などがみら
れ、さらにキリスト教からは小林珍雄（上智
大学教授・新）、玉置和郎（新）は生長の家
を中心、と数多くである。一方同志会では
大谷瑩潤（東本願寺派・現）、天理教では常
岡一郎（現）などがみられる。その他として
諸派、無所属では、無所属クラブに籍をおく
創価学会が注目される。三十四年の選挙では
全国区五候補を全員当選させているが、今回
は辻武寿、北条雋八の現議員と鈴木一弘、泷
谷邦彦、浅井亨、鬼木勝利、二宮文造（いず
れも創価学会理事・新）の七人をたてており

その他として、元木嘉一郎（天理教布教師・
新）などである。政治家が立候補するとき、宗教団体の組織
を無視することはできず、とかく利用するこ
とがある。しかし、純粋にその組織によって
のみ立候補する人もある。元来、宗教家の政
治活動を非難する人がある。それは過去の色
々な経験によるものであるかも知れないが、
われわれには「浄仏国土成就衆生」の理想目
的がある。そのためにも、現実的に政治を無
視することはできず、むしろそれを浄化する
ためにも積極的参加が望まれねばならない。

アメリカ旅行……(1)

佐藤 治子

(鎌倉大仏殿内室)



「アメリカ旅行談」を書く事になりました。自由に往来出来ない今日の経済状態に於て、特に私にアメリカの人の生活を、その中へ入ってみてほしいと云う一米国婦人、マリ

考にもなればと思い、御話をする気持で筆をとります。東部西部と十九州に渡つての思い出をたどり再び旅を致すわけですので、只御一緒に楽しんで頂ければ幸に存じます。

飛行機の中で

オン・ステッフンソンと云う人が、自分の財産を明示して、許可を得て私を招待して下さいた事から「家庭の一主婦」として渡米出来ましたわけで、寺庭に居りますものとして心構えをして居りますものの、特別に宗教的目的、或は社会施設見学などと云う大きな使命、或は性質をもったものでありません。日本を愛し、東洋的思想の何ものかをつかみつつあるマリオンは婦人として数少い一要職について居り、私の為に三週間の休暇を充二分に計画を立て、待つて居てくれました。二ヶ月余りの旅行者として珍らしい位、東部を北から南へと、そして西部へと六千マイル位ドライブし、各友人の家庭に泊り「見たり聞いたり」の旅をたった一人で、しかも日本の着物をきてもったいない旅をさせて頂きました。文を書くなどとは思ひもよらぬ事ですし又出来ない事です、御依頼を受け、これから初めて渡米なさる方々に何分の一かの御参

昨年九月におそつたA型台風の為、十五日夜立つはずであつたアメリカのノースウエスト機は十七日午前十時に出立ときまつた。秋晴れの空港に出迎え見送りの人達も少く、いよく乗込んで離陸するまでも近々と家族と暫くの別れを惜しむ事が出来た。今まで度々ジェットが急上昇するのを見て居て、のつている人達はクラ／＼としなにかしらと考えていたが、いよく滑走し初め離陸したなと思ふ間もなくぐん／＼上昇して行く時の何とも云えぬ壮快な気分！ ベルトをつける様にと云う注意の赤ランプも消えた。日本の島々など眺められるところか一路アンカレッジへ向けて高度を東北へ向け飛んでいる。暫く目を閉じ、思ひもかけなかったこの大旅行。未だ家の大工事もすっかり片づいていなかったのに、招いてくれる人がスケジュールをすつか

り組んで楽しんで待っていてくれるのだから行って来てはと云う家族の者が快く私にすめてくれて、思い切った海外への大旅行に出立した事。台風の為延期又、々々、そしてシアトル経由で行く事になったり、ニューヨークからは直行で来る様に長文の電報をよこしたり、台風の中を連絡がつかず、わざわざ予定の日の夕方羽田まで来て下さった方々の事等々、次々と思ひ出て来て感慨無量と感謝に心が一杯であった。

プロペラの飛行機とちがい、ジェットはスムーズに飛んでいる。かねてきいていた様に一枚の英文の紙を渡された。高価な品物をもっているか。いくらか、目的は何等々書入れるのである。このノースウエストはニューヨーク直行の只一本の国際線であるにもかゝらず塔乗員は全部アメリカ人で、東洋人が割合に多いのにアナウンスも早く、何を云っているのかわかりにくい。心臓を強くもっていないと心細い限りである。私は隣りの東南アジアの老人にどうかくべきか教えてもらい、どうやら書けた。一人おいた席には日本の若い人が辞書を取り出し、みづから一生けん命にかい

ている。羽田で二才位の子供さんを背おい三才位の坊っちゃんの手をひいて、あまりに心細いであつた若い奥さんに声をかけて上げ、ニューヨークへ行くと云うので、一緒に行きましようかと云って上げたその方は、全然英語が分からず、私はその青年にかいて上げる事をたのんだ。ほっとして外に目をやると翼に夕日がさしている。二時である。アナウンスがベラ／＼と早口、しかも低音、その上ゴウ／＼と云う爆音で窓ぎわの私にはきゝとれない。

まもなく夕飯が出た。三時で日本のお八つの時間。もう薄暗くなり、四時にアンカレッジに着いた時は真暗であつた。ぐんぐんと時計の針を進めているべきであつた。初めてアメリカの税関を通る。こゝではむずかしい事はなかった。しかも顔の税関も連れの坊っちゃん達のおかげで、私には通やくの御礼とOKで至って快調。

一時間休憩の後、夜の十二時に一路大陸を横断しニューヨークへと飛立った。この時二、三人前に居た東南アジアからの留学生二人が飛行機をのりちがえ大あわて、この人達のもののは三十分前にシアトルへ向け立ってしまった。

った。何とかかわいそうで、どうしたかしらと心を残し皆でのりこんだ、いつも日本の青年は私のそばに居て、この時も「あゝ、これですよ、親父に飛行機だけはまちがえるなよって幾度も云われましたよ」ってほっとした顔つき、留学すると云うのに会話、とくに話をきゝとれない不自由さは日本人ばかりではないらしい。

アラスカは夜の為、冷い空気を吸った位で何にも見えなかったのは残念。アンカレッジで初めて貴重な二ドルでエスキモーの人形を買った。招待で渡米する人は二百ドルだけ渡されるので、心して買物をしなければならぬ。

さて、私達（日本青年と奥さんと子供さん）は仲よしになった。隣りの東南アジアのおじさんはシアトル便に乗替えたらしく、となりは空席で、気が楽になった。「御飯の量が足りませんね」と云う青年に私の分を、御菓子とお茶だけ残し上げてしまった。「すみませんね」と云って喜んで喰べている青年をみて同じ年頃の食欲の盛な息子達をふと思ひ浮べる。ホステスはその奥さんの注文を、私の方

を向いては「何かほしい物はないか」ときく。

私が奥さんの遙か反対の窓ぎわから「何かほしいですか」「水を頂きたい。コーヒーを頂きたい」「水とコーヒーを上げて」等々三角形式のやりとりである。ホステスはニコ／＼と「ファイン」と大きくうなづきサーヴィス上々。奥さんは眠るひまもなく、だいたり、ねかせたり、でもよく子供さんは泣かなかったと感心した。毛布をくばられ、暫くねる。

目がさめると外はま昼間。時計は三時、おかしいなと耳のそばへもって行ったがチクタクと動いている。通路をホステスは、うでを組んで毛布をかけなおしたり、お客の様子を静かにみ乍ら歩いていた。青年も目をさましたので「何時でしょうか」ときいてみると「三時一寸過ぎです」との事。やはり針をぐっと廻さなくてはならなかった。おひる過ぎにニューヨーク着なので、やれ／＼未だ相当あるなどがっかりし乍ら地上をみると、遙か遙か下に雲とも海ともつかないものが見える。朝食が運ばれたのできくとカナダの上空を飛んでいるとか。はっきりと湖水が数知れず見えて来た。モントリオールの上空とか、バーサ

ーが話してくれた。

アナウンスが「レス、アン、アワ……」

と云う。バーサーも同じ事を云って前の列の人達に話しをしているので、青年に「何を云ってますの」とたしかめた。わからないと云うので、前の列の日本の人達にききに立って行かれたが、耳を指さし乍ら「どうもこれが駄目ですよ」と笑い乍ら答える。ヒヤリングの不自由さを皆が感じているらしい。バーサーをよび「くりかえして下さい」とたのむと「一時間足らずでニューヨークへつきます。

殆んど一周しましたわけです」と答へてくれた。私はあわてて「さあ、奥さん荷物をまとめて。御子さんをおぶって。」と声をかけ手伝って上げた。一時間も無いその時刻は、たちまちに早やニューヨーク州へさしかかっていたらしい。森が見える。そしてその中に点々と洋館がみえ初め、ベルト着用の赤ランプがついた。心はうきうきし初めた。大西洋へ出て大きくう回してぐっと下降する。青年は「あまりよい気持ではない」と云って目をつぶっていた。大都市とは思えない位森が多く、遙かかなたに摩天楼の市中が見えて来

た。海と森の上を大きくう回して翼が大きくかたむく。急に飛行場が浮び上って来た。

屋上にバラバラと人が見ている。アッ、見えた見えた！ 急いでハンカチをふる。向うも手をふっている。誰か男の人がマリオンのそばに立って二人で手をふっている。弟のジョンであった。ボストンから出迎えに来てくれたのだ。着陸と同時になれた人はほとんど降りて行く。「一番に飛び出して来ると思っていたのに、治子はおしまいに子供の手をひいて出て来た」と二人でおどろいた由。台風のおかげでおひる過ぎだったので、ニューヨークを上空からみおろし乍ら着陸したのである。僅か十六時間、ニューヨーク時間で同日（十七日）の一時であった。

ニューヨークの国際空港

アイドルワイルドの税関と果物

ここの国際空港は立派で、アメリカの人達の自慢にしている処の由。出迎えの人達は二階からガラス越しに下をみている。いやな感じを受けた。いやな処だとあとで云ったら、目を丸くして「どうして」ときかれた。「人

が税関のきびしい検査をうけている間、上から見下ろしているなんて失礼ではない？」と云ったので心外であつたらしい。マリオンは弟と許可を得て階下の内部へ入り、サクの向うで待っていてくれた。

広い税関内には乳母車の様な手押車を自分々々で押してさつと扉が開くとトランクがずらりとならんでいるのをめいめいが自分のをとつてのせ税関吏の処へ車を押して行く仕組みになっている。我れ勝ちにとる紳士、淑女ここではレディス・ファーストもない。私達は暫く待っていた。見兼ねたらしく黒人のポーターが「荷札を」と云って気を利かせてくれた。本当にホッとした感じであつた。ここでいよいよチップを払わなくてはと思いホステスが近くに居たのでどの位やるものかしらときいたら、二十セント位でよいでしょうとの事。黒人に渡そうとすると「ノーサンキューマーム」と云って絶体にとらない。あとできくと、チップの国でも空港内は必要ない由。ただし税関内の場合だけの事があとで判つた。お上りさん失敗の巻の一番目であつた。と同時に日本の着物のおかげで丁寧に扱って

くれた事は嬉しかった。この着物のおかげをこうむつた事は、この後幾度も経験した。見知らない別のホステスが近づいて来た。そして塔乗員一同が深く貴女に感謝してます



ステスの役目とか。それを日本人同志の私が知らずして御手伝いして来た事になったので、後で「御礼を沢山云われるのは当然よ」と他の航空会社の人にきかされた。やはりアメリカの国際空港だけの事はあるなと泌々と感じた。

さて広い構内に、改札口の様な処がいくつも並んでいて、税関吏が一人ずつたつて検査する。すいている処をみつけ、二三人ずつ順をまっている。私あまり時間がかかるのでマリオンがとつた許可のせいか、別のえらそうな一人が私のそばへ来て、「拝見します」と別扱いにしてくれた。トランクもさつと開けて目を通し、「OK」で済んだ。前に居た東南アジアの人が、袋ごと果物をとり上げられてしまった。「ああよかった」と思はずニコリとしてしまった。実は二十世紀の梨が好きなマリオンにせめて二つでもと、梨を下さつた友人の好意も無にしたくなく、羽田までもって来たのであるが、荷物を定量にするまでに幾度もつめかえた位なので、この梨二個も心残して家の者に渡して来たので、もし、もって来ていたらここで取り上げられたので

「よかった」と一人言を云って思わず頬がゆるんだのであった。マリオンとジョンはその理由が分らなかったので「何を笑っているのかしら」と不思議に思っていた由。この話をきいたジョンは「もったいない事をした。あのとり上げた果物もここで皆くれれば、おなかへしまっってしまったのに」と大笑い。果物は絶体持込不可と云う事は小さい事なので、誰方も注意して下さるのを忘れてしまったにちがいない。

さて、奥さんを手伝って上げなくてはならない。「果物は？」とやはりきかれた。通やくをする。「ハイ」と答えて小さいバックから梅干の袋をとり出した。アッ、まずいと思った。これもこの空港で分った事故どうにもならない。奥さんがコップ一杯ほどの梅干をビニールへ入れ、ニュージャージーの大学に居る御主人へ上げたいと遙々もって来られたもの。税関吏が二人よって来て、小さな袋のためつ、すかしつみている。梅干の説明をしたってビジネスにべらべらと上手に英語が出て来ない。「一寸待って」と友人に挨拶など忘れ、手まねきして、近づいて来るなり「一

寸梅干おほえてませんか？」「オーイエス」べらべらと「日本人のかくべからざる物なり」と話してくれ「OK・OK」で通ってしまった。涙をためて礼を云って下さる奥さん、心細そそうな青年、いつまでもはなれにくい。さあさあとマリオン姉弟にうながされ、心を残して空港を出て、前から私を乗せたいと云って居た車に二人にかこまれ真中へヤレヤレとこしかけた。後の席から何かとっ

て、ひざへそつとのせてくれたものがある。「あっ、おしほり」よくも日本人の習慣をおぼえていてくれ、長途の旅行に、これこそあたたかい第一番の心こもれるおもてなしであった。ビニールの袋にあつくしほったまま入れたらしい。とり出すと未だあたたかい。涙がふっと湧いて来た。

新規会員紹介

(昭和三十七年一月以降)

三重 愛知 静岡 長野 新潟 北海道 秋田

北出立仙 徳雲寺 水谷大成 森順照 正立寺 大庭武彦 安静釈成 来迎寺 西島ちよ子 斎藤清稚 善光寺 伊藤ミヨ 本間慶歎

青森 栃木 茨城 埼玉 神奈川 東京 大分 佐賀

山本甚三郎 専修寺 桑門満瑩 齋藤昭俊 山本道男 松本義男 土川浄康 大江運寺 江良実 中尾正之 行慶寺 鈴木直民 海岸寺 満武豊二 満武けい

表紙の写真

タフガイの明王

不動明王像 京都 東寺

川端康成氏が「朝日新聞」に連載していた小説の「古都」は、失なわれ行く京都の姿を独特の文章でつづり、多くの人々に感銘を与えたことはいまでもない。私も久し振りにゆっくりした気持ちで読み、その文学的表現に酔わされ、思わず引ずり込まれてしまった。

たしかに京都は古都という感じがする。そしてだんだんと新しい街に変わって来ていることも事実である。けれども他の都市にくらべれば、そこにはいうにいわれぬ何物がある。京都駅のすぐ後にある東寺も、境内の中に入ると市内にいる気持ちに全く忘れてくる。莫大な施地の中に、整然と揃っている七堂伽藍、崩れかかった土塀、ガラガラツとうるさい音をたてる戸など、その一つ一つが自然とわれわれを平安時代の昔に誘え込んで行く。



小さな四脚門（北総門）をくぐり、美しい石畳を真直に行くと亀の沢山いる堀がある。堀にかかった可愛い石橋を渡り、格引張った北大門を入ると正面に食堂・講堂・金堂と一直線に並び、右側には大師堂・客殿、左側には宝蔵、そして金堂の左に品のいい五重塔がそびえて見える。その広々とした美しさはシネマスコープ以上、雨天の風情はまたひとしおである。

絶対に観光寺院にはしないといっていた東寺ではあったが、種々なる事情で講堂を開放し、観覧に供している。この中には二十一軀の像があるが、ほ真の不動明王もその中の一軀である。

不動明王の相好は、懸力と羂索を執って、頭上には八気の蓮蒙をのせた沙髻を頂き、左に乗らす髪は七ヶ所に束ね、左眼を細く半眼に開き、下歯で唇の右端を噛みみているのが普通である。ところが東寺の不動明王像は、きれいに櫛の入った髪をオールバック風に、しかも耳の前で長く胸に垂し、太い眉の下には大きく開いた目が炯々と輝いている。またそれに一層激しさを加えるゴツツイ鼻と、牙

齒をむき出しにして一文字の下唇を噛んでいる形相は他とは異ったもので、平安時代初期の古い形であったのかもしれない。

ほんほん燃え上がる火焰を背にしながら、最上の怒りを遺憾なく表現しているこの恐ろしい姿は、いかにも理智的にこやかな大日如来が変化して現われたものといってもびんとこないであろう。しかしこの姿は、慈悲の優しさで救うことのできない極悪人を救うための変った姿なのである。こうして考えると、この恐ろしい姿の中にも、どっしりとした泰山のような威厳と、どんなことをしても救済しようという慈悲を秘めた内証の深さがにじみでており、たのもしいつガイぶりが連想される。

古い都がいつしか新しい街と変わって行くように、人間の気持ちも変わって行くのは当然である。そして美の内容も変わっては行くが、美を求める人間の気持は永久に変わるものではない。たとえ美の内容はいかに変わろうとも、慈悲を秘めた不動明王像は、凡夫を救済し続けるであろう。



隨筆

亀と名号

村田嘉久子

(元帝劇女優)

青葉から初夏へかけての時候が私は一年中で一番好きな季節でさいます。それがと申しますのが、性来身が弱

のと眼が悪いのとで、

この時候になると身体にも眼にも大変工合がよいので勢い好きな季節、という訳になるのですが、又別にこの季節が好きな原因に六月

の初旬私の生れた、又今も住んで居る品川では日本五大祭礼の一つ、と言はれる程のお祭りがあるからで、子供の時から下町に育った私はこの祭礼が一年中の楽しみの一つでした。

今は何も彼もが簡単になって、昔のおもかげはなくつまらない祭りになりましたけれど、そしてそれも年々さびれて、せまい町の中にタクシーやトラックが入り込んで来るのを考へれば、神輿をかつく若人達も気の毒なほど神経を使はなくてはならない、という有様では祭礼も面白とばかりも言って居られません

私の娘の頃、酒仲買問屋をして居た父は、町内でも上に立って居たのでしよう、祭礼の時はとてもいろいろの行事が派手に行はれました。いくつもいくつもの神輿は、私の家の店の前で一度御こやすみをしますが、その時酒樽の鏡をぬいて、一升ますで飲めるようにしてありましたから上戸は摂りません。世話人がいくら注意をしても、もうそのまま「松本屋」(私の家の家号)の前でトラになって仕舞い、神輿は又新年がかつくと言った風景がよく見られたものでした。小売のお酒はいくらかませりのでもしてあるのでしよ



う。不常それを飲んで
いる人が樽からの生地
のまんまをいくらでも
飲めるので、立てなく
ないのは当り前なので
すが、それが如何にも
お祭り気分ではほえま
しい気分でした。

或る時、真浦と言っ
て漁師町から五六人の
若衆が、大八車へのせ
た大きな正覚坊を店へ
持込すで来た事があり
ました。正覚坊といの
は、海で聞いた事です
が最初は大ききら亀だ
と
思
つ
て
居
り
ま
し
た。
こ
れ
は
よ
く
あ
る
の
で
、
そ
れ
ま
で
で
も
二
三
度
漁
師
の
人
達
が
持
つ
て
来
て、
父
が
そ
れ
を
買
取
つ
て
又
家
の
番
頭
や
若
い
衆
小
僧
ま
で
が
附
添
つ
て、
品
川

の海へ流しにやったものですが、その時の亀
は又随分大きくって店の土間へ下された時は
眼をみはる位いでした。やがて、言い価どう
り父は買ってやったらしいのですが、何を思
ったか奥へ入って母に大きなすずりと又大き
な筆とを持って店へ引返へして来ましたので
背高な顔をして父の顔を見詰めて居ました。
すると父はそのすずりに墨を沢山すらせて筆
へタブリ含ませ、自分は土間へ降りてその正
覚坊の上へ乗って仕舞ったのです。私達はび
っくりしてあの正覚坊がどうかしたはずみに
甲羅を強くゆすぶり、父をふり落して仕舞や
しないか……と母や姉妹とも顔を見合せてそ
れこそ片ずを呑む、と言った格巧で見守って
居ました。

やがて、父はその大きな亀の背に太筆を動
かし、大きな字で、「南無阿弥陀仏」と六字
の御名号を書き上げました、そして自分は亀
の背から降りると「この亀にお酒を飲ませて
御らん」と若い衆に言いつけましたので、さ
あ皆面白がってますへ一杯入れたお酒を正覚
坊の口の処へ持って行つてやると、思いなし
か眼を細めるような表情になって、飲むは飲

むはまたたく間に一升ますは空になり、代り
を当てがうと又一ト息き、その内、亀の眼が
トロンとして何んとも言はれぬ愛嬌のある可
愛い顔つきになって来たので、皆手を叩い
て笑い合いました。

漁師町の人や又家の番頭が附添って、今度
は沖の方へ行つて流してやる、と店を大勢の
人そろそろ出て行つた後で、父が私達に話し
て呉れましたが、今まで持込んだ亀は、海へ
流すと約束して買取つたのに、海へ行く途中
にとこかへ売られてやし（見世物）の手に渡
って仕舞うのだ。今度の亀は「南無阿弥陀
仏」と書いたから大丈夫だよ、と言つて聞か
されました。

毎年六月の祭礼が来ると、御名号を背に乗
せた亀の事が思い出され、近頃身近かに朝夕
御称名を口にする度に、これまた亡くなった
父のその時の言葉や亀の事が思い出されま
す。

☆

☆

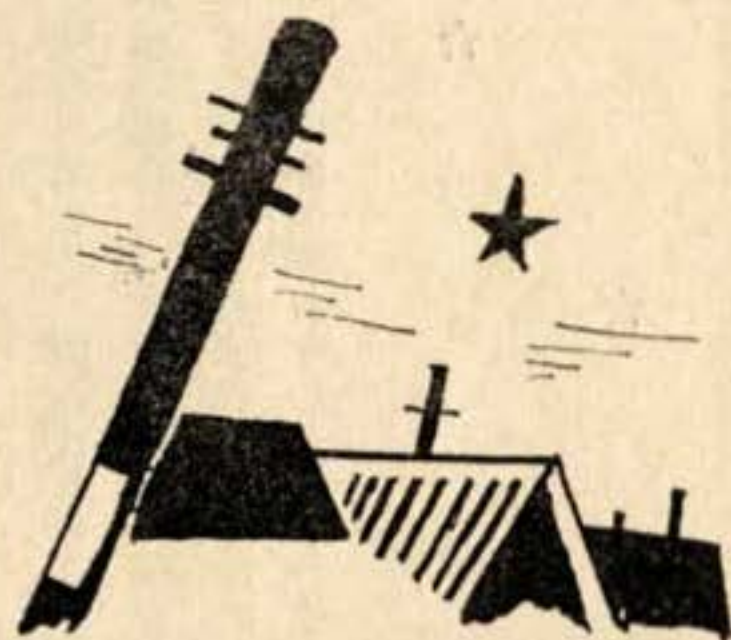
ボーイスカウト

と

宗教教育

内山 憲 尚

(駒沢大学教授)



一、ボーイスカウト運動

ボーイスカウトは一九〇八年イギリスのベーデン・ポウエルによって始められた、青少年の社会教育運動である。

ベーデン・ポウエルが一九〇〇年南阿戦争の際、メーフギングでボアの土人軍に包囲され二百十七日の間動きがとれなかつた時、少年斥候をうまく利用して、本隊と連絡をとり五月十八日包囲を破つて勝利に導くことができた。ベーデン・ポウエルは「少年も訓練の仕方によって、充分役に立つものである」とことを悟り、退役後ボーイスカウト運動に挺身

し、一九〇八年(明治四十一年)に「スカウティング・フォア・ボーイズ」を出版し、ロンドンに事務所を置いてスカウティング運動を開始した。

わが国に入つたのは一九三三年(大正十一年)で、スカウトができてから、十五年目の四月十三日に静岡市に於て「少年団日本連盟」として結成され、総長に後藤新平、理事長に二荒芳徳、副理事長に三島通陽氏が就任し、国際登録をした。

日本の少年団運動は次第に盛んになってきたが、昭和十三年に日華事変が発生し、新体制がとられ、少年団も解散させられてドイツ

のヒットラーユーゲンとに倣つた、「青少年団」が各学校を中心にして組織せられたが運営面は殆んど動きがなく、終戦を迎えた。

昭和二十二年頃から、新らしく、ボーイスカウト運動が復活してきて、今日のスカウト運動の基をなした。

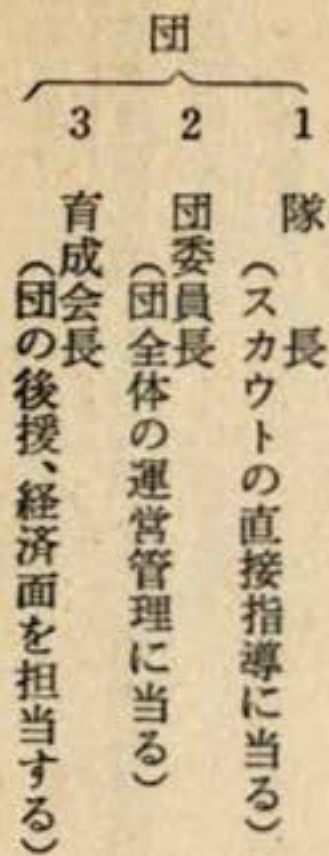
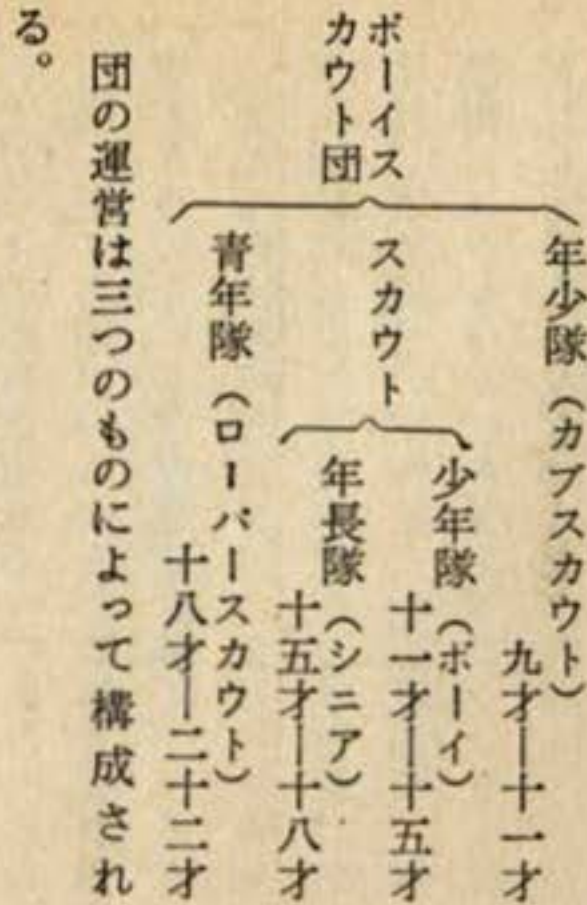
今日では全世界六十数ヶ国でスカウト運動が盛んに活動をしていて、アメリカでは四百万人の団員を有している。わが国は四万に近い団員で全世界では十數位にある。

本年は八月三日から八日まで御殿場で第三回の日本ジャンボリー(ボーイスカウトの大会)が開かれ同時にアジア(インド、ビルマ

タイ、中華民国、セイロン、オーストラリア、フィリッピン、バキスタン、インドネシア、韓国、マラヤ等）の諸団のスカウトの参加によるアジアジャンボリーが開催される。おそらく三万に近いスカウトの大祭典が展開されると思われる。

二、ボーイスカウトの組織と目的

ボーイスカウトは年令に応じて教育組織が立てられており、それぞれ訓育のプログラムが実施される。



ボーイスカウトの訓育法はバトロールシステム（班制組織）でボーイスカウトに於ける一班八名（四ヶ班で一隊）カプスカウトでは一組六名をもって単位とする。

訓育の目標はカプスカウトではやくそく

僕は、まじめにしつかりやります。カプ隊のさだめを守ります。

さだめ

- 1 カプスカウトは、すなおであります。
- 2 カプスカウトは、自分のことは自分でします。
- 3 カプスカウトは、たがいに助けあいます。
- 4 カプスカウトは、幼いものをいたわります。
- 5 カプスカウトは、進んでよいことをします。

であって、小学三四年五年に適するようやさしいものがあげてある。ボーイスカウトの目標は、

ちかい

私は、名誉にかけて、次の三条の実行を

誓います。

一、神（仏）と国とに誠を尽し「おきて」を守ります。

一、いつも他の人人を援けます。

一、体を強くし、心をすこやかに、徳を養います。

おきて

- 1 スカウトは、誠実である。
- 2 スカウトは忠節をつくす。
- 3 スカウトは人の力になる。
- 4 スカウトは友誼に厚い。
- 5 スカウトは礼儀正しい。
- 6 スカウトは親切である。
- 7 スカウトは従順である。
- 8 スカウトは快活である。
- 9 スカウトは質素である。
- 10 スカウトは勇敢である。
- 11 スカウトは純潔である。
- 12 スカウトはつつしみ深い。

訓育の標語としては「そなえよ常に」に日常の準備、毎日の心構えを強調し、実践のスローガンとして「日々の善行」をあげて、奉仕精神と奉仕の実践の場に立つことを主眼と

している。

教育の訓育法として①野外生活②進歩制③技能章制をあげることができる。

1 野外生活

スカウトの訓育は出来るだけ野外が教育の場に充てられ、いろいろな野外生活が指導される。しかも、児童の生活にアッピールするものが多く、ピクニック、ハイキング(追跡ハイク) キャンプなどは勿論、結索法、手旗信号、渡河法、地形測量や、自然物コレクション、キャンプファイヤーなどこどもの興味をもつものが教育にとりいれられている。

2 進歩制

カブスカウトでは、りす、うさぎ、しかくまと進み成績によって、銀矢章、金矢章が与えられて、進歩が証明される、マークをつける。

ボーイスカウトでは、初級、二級、一級、菊、隼、富士と十八才まで、それぞれ進歩の程度によって進級することが出来る。そして、その級の記章が与えられて腕につけられるのである。

3 技能章制

少年達が社会に対しても、自分自身に対しても役立つ各種の技能を修得することによって、それぞれ技能章が与えられる。技能章の種類は、野学章、救急章、看護章、炊事章、水泳章、消防章、案内章、自転車章、園芸章、音楽章、写真章、絵画章、裁縫章、洗濯章、木工章、修理章、電気章等三十数種類に及んでいる。

ボーイスカウトの目的は健全なる青少年を育成する、青少年の社会教育で、野外の自然環境の中で綿密に組まれたい訓育プログラムにより、また愉快的ゲームなどを通して、楽しみながら、社会生活を身につけてゆく公民教育であると言えることができる。

更に国際愛をもった国際人を養うことも一つの目的である。ボーイスカウトは国際的なもので服装も世界全国同一のものである。

またボーイスカウトは平和を愛することを目的としている。自然を愛し、人類を愛し、国際愛を育成します。

ボーイスカウトは正し民族教育を育成します。郷土を愛し祖国を愛する気持ちを養い、

国旗を尊敬します。

三、ボーイスカウトと宗教教育

ボーイスカウトの創始者ベーデン・ポウエルは、宗教心の篤い人であり、スカウテングにも宗教の必要性を強調した。「ちかい」の第一条に *To do my duty to God and my Country* と明示した。わが国ではこれを約して「神(仏)と国とに誠を尽し」としたのである。

スカウテングに於て考えられる宗教的教育の主なものあげれば次の如し、

- 1 指導者の信仰による宗教教育。
- 2 環境による宗教教育。
- 3 自然による宗教教育。
- 4 年中行事参加による宗教教育。
- 5 生活其他による宗教教育。

宗教章について

アメリカでは七年前から「宗教章」が実施されており、スカウトの国際本部でも、宗教専門委員会ができて、「宗教章」(Religious Awards) が制定されている。わが国でも数年前より研究の結果、本年三月十七日、授与

基準ができて、愈々交付が実施に移されることになった。

仏教章授与基準は次の如し。

一、釈尊の伝記と教えについて述べること。

二、仏旗と仏教章の意義を知ること。

三、宗派名、本山の寺号と所在地、本尊の御名、宗祖の御名を知ること。

四、宗祖の伝記について述べること。

五、礼拝作法を知り、実際に行えること。

(合掌の仕方、念珠の持ち方、焼香の仕方)

六、仏壇の荘厳法を知ること。

七、家庭勤行のできること。

八、儀式に用いる仏教讃歌を歌えること。

九、仏教行事の意義を知ること。(修正会涅槃会、彼岸会、宗祖降誕会、花まつり、うえさか、盆会、成道会、その他)

一〇、宗の教義の概要を述べること。

一一、報恩感謝の生活への実施記録を提出すること。

一二、その宗の信仰に基づき、地域社会及び寺院のために奉仕すること。

四、結びとして

仏教児童教化は振るはない、仏教日曜学校は殆んど影をなくし、仏教こども会は姿を消してくる現状である。この大きな原因は従来ものは①静的であったこと②女の子中心であったこと③室内的であったこと④低学年向きであったこと⑤カキリキュラム、プログラム等の組織がなかったこと、等によるものである。一二年か四五年生のこどもを集めて折角教育しても五年生を卒業してしまつたら来なくなるという現象は、仏教日校やこども会のやり方に欠陥があつたのである。

ボーイスカウト運動は、世界的青少年の社会教育運動として発展の一途をたどっているばかりでなく、その組織、教育の方法が、青少年の生活や心理に合致している点に於いてすぐれている。

しかも、今回宗教章制定によって、深く輝かしい仏教の信行が青少年の胸につくこととなるであろう。

この夏のアジアジャンボリーにはアジアの仏教国のスカウトたちを迎えて、国際色豊かな、親善国際仏教礼拝が行われることだろうが、仏教徒のボーイスカウトが全世界の仏教徒と固く手を握って仏教の隆盛と世界平和を祈願するよろこびに浸れるだろうと今からその日をたのしみに待っている。(ボーイスカウト第十一団委員長・東京連盟理事)

新規会員紹介 (2)

高知	岩井 浄海
和歌山	永井 湛昌
大阪	上野山 瑞光
京都	法 驚 寺
京都	専 念 寺
京都	誓 願 寺
京都	土井 竜 徹
京都	本 願 寺
京都	招 善 寺
佐賀	平 野 誓 庵
熊本	念 仏 庵
長崎	金子 貴達
福岡	松野 瑞昌
福岡	古屋 丑太郎
山口	西 方 寺
山口	岡 崎 覺 寺
山口	南 寛 我
山口	受 光 庵
広島	常 運 寺

近代
高僧伝

颯田 諦真

大橋 俊雄

颯田清左衛門には十二人もの子供たちがおったが、信仰心のあつた家に出家者のであるのは必然の理。生れてた子供達には皆それぞれに三帰戒を授けられ、その中六人も出家し、長女りつにつづいて出家したのが次女諦真であり、姉とは三つ違いであつた。彼女が母の許で手伝いをしていた頃から姉の本真は「前お嫁入りするじゃないぞ、同じ苦勞をするなら出家した方がいい。極樂行きの道に専念できるから」と口ぐせのようにいい、妹もその気になり、遂に両親の許しを得て出家の望みをとげたのは、慶応元年十八才の時のこと、その師は貞照院の天然和上であつた。以来徳雲寺の姉本真のもとにあつて修業をつみ、日課三万遍の念仏を相続され、明治十四年には黒谷本山に於て宗戒兩祖を相承したが、加行の時は姉妹二人連れだつて三河から京都まで托鉢しながら歩かれ、時に江川大津のとある茶屋でお茶をよばれた。この二人の

尼僧の何気なく語る談話を聞いて感心した茶店の老婆の「もっと有難いお話を聞きたいから、どうか今夜はここに泊り、ゆっくり法話をきかせて下さい」という懇請によつて、すすめられるがままに宿り、村人たちとありがたい法話をなされて一夜をすごされたという。明治十四年といえ、諦真二十四才の時であり、若さの中にもあつた信仰の火は饑にともえさかつていた。徳雲寺の本堂普請のとき、毎日の勞力奉仕の人達が三十人程来ており、その人たちに、しかも五回の食事を出す役目をうけもつていたのは諦真尼であり、彼女はそればかりではなく、それ等の人たちが来たら直ぐにも仕事ができるようにといつて、朝早く起きて塵一つとどめないようにきちんと掃除しておいたので、何時か村人たち

も「諦真さんは三人分の働きをなさる」といつてはめたたえたという。全てが万事、そのような調子で普通の男僧など到底及びもつかぬ有様。常に姉本真を法姉と仰いで一目おき、影の形にそうが如く随從して修業をつまね、どのようなことがあつても絶対服從、その言にそむくということとはなかつた。「お弟子にして下さい」と頼まれることがあつても「おれは弟子をとらないといつて法姉のもとにおくり、「庵主さん」と呼ぶ人があれば「おれは庵主ではない」おれには諦真という名前がある」といったというのも、自分は罪惡生死の凡夫であり、單に阿弥陀さまのお指図によつて念仏申させていただき、阿弥陀さまへのお取り次ぎをしているにすぎないという謙讓の精神の發露からであつた。そして「三日托鉢しないと沙門ではない」とお釈迦さまもおっしゃったからと言っては、釈迦彌陀兩尊のみ教えをしつかりと胸にいただき、み教えのままに歩もうとなされたのであり、従つて托鉢の修行をかかしたことはなかつた。

泉谷西寿寺は袋中上人が山をきり開いてつくられた念仏三昧の道場であり、後に浄土律

院となったが、長い間無住の時代がつづき荒れはてていた。阪根弥兵衛は何とかしてこれを復興したいと思い、昌光律寺の志運和上に相談したことがあった。寺とはいふものの名のみで、こわれている所もあれば雨漏りもする、寝るところさえもなく、草は腰のあたり



までおい茂っていた。誰が好きこのんでこのような所に住む人があろうか。余程の信仰心の厚い人でなければ住することもしないし、再興も望めない。再興するとならば「普通の男僧ではとてもやって行けまい、余程の志の

篤い尼僧でなければ」ということで、阪根翁は志運に相談したが、時に白羽の矢は本真尼は忙しいだろうからということで、諦真にむけられた。「私は田舎者で何もわかりませんが、誰かわりの人が見えるまで、とりあえず三年間お預りしましょう」それに又三人位居なければやって行けまい、一人一日三合と見て三人分の食費をあげようとの約束で、寺にやって来たところ耳に聞いた以上の荒廃ぶり。とりあえず寝るところをつくり、朝はどんなに疲れていても三時には床を出、山から薪をとってきては「私が此の寺において頂いたせめてもの手形」であるといつては貯蓄し三人分扶持をうけた食費のうち二人分は貯蓄するという始末、こうして得られた蓄財で次々と寺を修繕された。

一年二年と努力を重ね、何時しか約束の三年が訪ずれた。志運は三年目に代りの人をつれて泉谷にこられたが、もう四日目には何処かへ逃げてしまうということで、遂に尼はここに永住することになってしまった。尼はどんな暗がりでも仕事のできる人で、泉谷では二反以上もある畑に自ら鋤をいれて立派な

桑畑もつくられ、病床に臥してからでも自分で出来ることは何でも自分でやってのけた。曾つて「私が泉谷に来た時は誰一人知った人もなく、終日終夜来る者としてなかった。お勤めめなければお逮夜もなく、食べるものもなければ着るものもない、実に淋しい生活であった。毎日何とも致し方ないので朝早く起きて暗い内に村を出て他村にいつて托鉢し、晩は日が暮れてからこっそり寺に帰った。周囲の草はどんなものでも食べられるものは食べて見た。草は芒々として境内一杯にはえ茂りお墓も雑草がはえ茂って見るも恐ろしいような感じであった。今から昔を考えて見るとよくもこんな所に来て永く辛棒したものだ、自分ながらあきれる位である」と述懐したことがあったという。泉谷は諦真なしには復興できなかつた。誠に尼の一生こそは大悲菩薩の大行であつた。しかし積りつもった無理がたり、腎臓病と過労のためにたおれた体を病床に呻吟すること十年、本真を助けて二利行をつんだ不言実行の徳僧も病には抗しがたく大正十三年十一月二十五日眠るが如く安楽国に旅立たれた。法名を智海諦真沙弥尼という。

浄

土

念 仏 入 門

藤 井 実 応

○婚約ができ結婚の日取まできまった娘さんが急病の為に亡くなった。両親のなげきは、とうてい言葉にはあらわせない。殊に母親の悲しみは、頭がどうかなったのではないかと思われるほどであった。半年位毎日のように訪ねて来ては、娘は死んでどうしているのでしょうか。私はどうしたらよいのかと、泣きながら、同じようなことをくりかえされるのであった。できるだけしんみになって聞いてあげ、おなぐさめしていたのであったが、阿弥陀仏の本願とどうか、悩めるものを救わずにはおかぬ大慈悲の心にふれられて、元気を回復し、念仏申す身となられて、後には檀那寺の婦人会の幹部として献身的に働かれ、信仰のよろこ

びを領ちあう身とられた。

○学徒動員で戦地に赴いていた息子が無事還って来て、両親はじめ周囲の人々みんなのよろこばれたのはいうまでもない。京都大学に籍があったので、再び入学勉強することとなり、食糧不足の折柄、食糧などたんまりと仕こんでリクサックを負って元気よく京都へ出発した。下宿におちついて勉強していることと思っていたところ、数日過ぎて京都の警察署からの電話に驚いて行って見ると、東山の山中で誰かに殺されていたのである。「こんなことになるのなら一層戦死してくれた方が幸であったのに」と、どんなになげいても、その事実はどうにもならぬ。親の悲しみは筆

舌のよくつくすところでない。殊に父親は前から仏法を聞いていた。信仰もあると自任していたのに、この悲惨事にあうて、今迄の信は力にならなかった。無力な愚かなどうしようもない自分をそこに見出すよりほかなかった。その人も半年ほど魂のぬけがらのような状態で、仕事も手につかず、周囲から死にはしないかとまで心配されるほどであった。しかしながら如来はよろしきにはからいたもう。救いのみ手は常恒不斷に倦むことなくさしのべられていた。救いのみ手に抱かれていたと気づいたその人は、立ちあがられた。亡き息子が無駄死にさせてはならない。残れるものの上に亡き人の命は生きている。共に生きゆく信仰のよろこびを一人でも多くの人に分けよう。そこになき人も生きる。われも生きる。他も生きると、自らの業務に精進すると共に、毎月亡き人の命日に、善知識を招いて信仰の集い開き、すでに十数年、同じみ光を仰ぎ共に生きゆく道に励んでおられる。

○店は火事で丸焼けになり、その上、妻と子が焼け死んでしまった。そうした悲惨事にあうたことが深い信仰に入る動機となった。檀那寺の本尊の前で男泣きに泣きながら念仏を称えたことが出発点となって、毎早朝、念仏が称えられるようになった。一人の燃ゆるような念仏の声は、お

のずから友を呼んで朝起念仏会ができた。毎朝十数人の人々が声高らかに念仏が称えられるようになった。涼しい夏の朝はいうまでもなく、嚴寒木魚うつ手の痛さを感じず朝も念仏はつづけられた。春風秋雨、少しの休みもなく、今日まで三十余年継続されて、幾多の人々に信仰の火はもえうつっていった。今も北信の地にその人を中心毎朝念仏の声が響きわたっている。毎朝亡くなりし妻子の墓、先祖の墓に線香が手向けられている。

○昔、泉式部は一人女の小式部内侍に先立たれ、哀悼に耐えずして

もろともに苔の下には巧ちずして

ひとり憂き目を見るぞ悲しき

と詠んだが、それを発心の動機として性空上人の化導にあり、念仏え味の身となって

夢の世に仇にはかなき身を知れと

教え帰る子は知識なり

と拝まれたという。まことに信にめざめてみれば亡き子は善知識観音菩薩であった。

子を亡くし、親しき人に先立たれて念仏の信仰に入られた人々が次々に思い出されるが、今煩わしくこゝに述べることを略そう。

○近頃は親と子の間柄がうまくゆかぬので相談をうけることがよくある。或る人は子の結婚問題で親子意見があわず子は思う人と結婚して家を出てしまった。親元へはよりつきもせぬ。自分の身にどうなってもあの子の幸になるようにと愛し育てゝきた子にそむかれて、母親はあきらめたといゝながら涙と共に愚痴が出る。一時は念仏などどこかえいってしまつて、称えられませぬとまで言われた。しかしどうにもならぬなら、どうにもならぬまゝ泣けるなら泣きながら、仏前に座つて、念仏申すようにおすすゝめした。

みほとけのみずしの中ぞ人知れぬ

わが悲しみのすてどころなる（甲斐和里子）

泣きながらも念仏は相続された。悩めるもの、悲しめるもの、重荷を負えるものゝ上に、如来のやるせなき慈愛は、一層そゝがれるのである。泣きながらの念仏の上に、如来の慈愛は堪えず照して導かれていたのである。今迄は息子がわるい、嫁がわるい、主人のやり方がいけなかったと他を責めてばかりいたのであるが、み光は脚下を愛し省みさせられた。私が悪かったのですと、その母親の口から出るようになった。「全く私が悪かったのです」と仏前にサンゲせられるようになった。病氣入院ということがきつかけになって不思議に親子和解の間が開かれていった。「私が

わるかった」とは何と導い言葉であらうか。全責任を負つて立ちあがったサンゲ清浄の言葉といえようか。如来の光明摂化の不可思議の事実を拝まずにはおれぬ。

○十年の結核療養所で血を吐きつゝ療養をつづけていた人がある。療養中真剣に道を求められ、療養そのものの中に安らぎと感謝を味わるる信境にまで到達しておられた。最近血もとまり、だんだん病を克服して「鶏の世話ができるようになりました」と悦びと感謝にみちあふれた手紙を頂いた。病にかかり、安静をつづけねばならぬ身となつてみると、健康のありがたさ、働くことのよろこびが一層分ることであらう。まして信火が点ぜられると、鶏の世話に最上のよろこびを覚え、病床の中にも感謝の世界あることが味われるであらう。

○子に先立たれたり、災難に出あうたり、病にかかったりすることが宗教の門に入る大きな動機となることは多い。しかしながら信仰にめざめるには、かのような悲惨な目にあわねばできぬのかといえ、そうではない。かような人生の非常事態に出あうても信仰に入らぬ人もある。又、かようなことにあわなくとも信にめざめる人もある。

或る仏教青年会で、どうして会員となつたかを話合つたとき、父や母に早く死別したので道を求めるようになった

という人もあったが、父母や祖父母が信仰に篤い人であったので仏教はよいものであると思つて会員となつたという人や、幼少時、朝夕仏壇にお参りをするようシツケをうけたことや、父母につれられてお寺へ参つたことが縁となつて仏教を求めることになつたという人が多かつた。

又、六十才を過ぎた人の述懐に「私が今日仏教を信じ、世の爲、人の爲にお役に立つことができればと思つて働かせて頂くようになったのも、思えば父母のおかげであつた。父母の念願が生きて私が働けるようになったのだと六十の年になつて、おくればせながら、氣ずかしてもらひました」と。謙虚な態度で、幼少年時代の出来事や父母の心持ちについて語られたことがある。まことに、先祖、亡き人々の還相のお力も加わつて今、念仏申す身となりえたのであるとよろこべる。信仰ある家に、信仰の人が育つ、わるいものもよいものも伝わつてゆく、恐ろしいことであり、またありがたいこともある。

○大切なのは眞実に生きたいという願いである。この願ひのないものはないであろう。これが宗教的要求であり、宗教心といえよう。この眞実に生きたい願ひを以て眞実を求めることである。この願心、求道心こそ人間の生命的な要求であり根本的な願である。これある故に宗教的世界は開

かれ、信の道にめざめることができる。たとい逆境にであわなくとも、人生々活の上に、この願心あれば、こんなこととてよいのかと自分の生る方が問題になり、又自身が問題になる。その時こそはつきり宗教の門、念仏の門が開けてくるのである。

○現在の自身が問題となれば、自身が省みられることとなる。生れてやがて死んでゆくことの人生が、ひとごとでなく自身の直接な問題となつてくる。やがて死すべき身なのである。しかも死はいつやってくるかかも知れぬが、必ず一度は当面せばならぬ。死の前には日常、価値あるものとしていた富も榮譽も地位も利益もみな無に歸してしまふ。愛するものとも分れてしまわねばならぬ。まことにはかない限りあるいのちなる自身である。かかる身のいかに生きゆくべきであろうか。しかも何と煩い悩みの多い自身の生活であろうか。自身の爲になり利益になるのには愛着し、それに反するものは憎悪する。愛憎の念にかられて散乱妄動する。私よくしたいと願ひつつ心を隔ていさかいをしてゐる。眞実を求めて眞実になりえない身である。まことに煩惱具足せる凡夫とは自身のことである。為すべからざることを為し、為すべきことを怠る。特に愛欲の広海に沈没して罪を犯さずには生きてゆけぬ自身である。善導大師の

お言葉の如く「自身は既にこれに罪惡生死の凡夫である。」この現実の自身をとおして過去をおもえば「曠劫よりこのかた常に没し常に迷いの世界へめぐり来た」のであり、未来をおもえば「とうてい迷の世界を離れることのできぬ」身と信ぜざるをえぬ。どうにもならぬ自身である。頭を上げぬ自身である。

かかる自身に気づかせられたのも、み教のおかげでありすでに大なるみ光に照されたからであるといわねばならぬおもえば、かかる身が限りなきめぐみの中に、今現に生か

されているのである。善惡平等に摂め取られる絶対大悲というよりほかなきお力「阿彌陀仏の本願あって、一切の生きとし生けるものを光明に摂めとって護り育て浄土に生かしめ給う」と信ぜざるをえぬのである。塵が光におさめとられて塵のまま光となっていているが如くである。かかる大慈愛の仰はたらき（本願力）に生かさるる事実を体感するが今の南無阿彌陀仏である。南無阿彌陀仏するところ一切の生きとし生けるものを生かしたもうみ光に摂めとられて、人々共に生きゆく平和世界が開かれてゆく。

みたまよ永遠に



四月末から五月の初めにかけては、例年のように飛石連休であった。その中日、五月三日、五月三日、一夜、一日を楽しくすごした人々

もあつたであろう、また休日でも仕事をおえ帰りを急いでいた人もあろう。それが、一瞬にして、悪夢の休日と化してしまったのである。思い出してもぞっとするようなあの惨事は、常磐線三河島の国電・貨車衝突事件は、国鉄史上でも屈指の惨事となつてしまった。子供のために土産を手にしたままなくなつた人もいるかも知れないし、帰宅を待っていた家族のところへ急いでいた人もいるであろう。ああ、それがもう二度と再び帰らぬ人となつてしまったのである。おそらく、この怒りをその肉体の中に入れてあるまま、永遠に帰らぬ人となつた人々もあるであろう。百

六十人を越えた死者、それに今なお、毎日毎日白い壁をながめながら、全快の日を待っている人々もいる。今年もまた例年のお盆を迎える。なくなつた方々の新盆を迎えるわけであるけれども、私達迎える方は、この大惨事が二度と起らないためにも、この尊い犠牲のみたまに、永遠なれと祈うずにはおれない。



新浄土宗に望むもの

その一

覆水盆に返る

司会 「覆水盆に返らず」ということわざがありますが、宗教界の一つのシンクスをやぶって、このたび浄土宗が合同を実現したということは、まことに画期的な出事だと思われます。たゞ、こゝで分裂した二つの教団が一つになったというだけでは、今までの費した年月又はそれにともなう莫大な損失から思えますと、意味が半減するように考えられます。むしろ、この合同をエポックとして、新しい浄土宗が名実共に近代化され、合同ブラスアルハの力が出されなければならないと存じます。

その意味において、今席は、明日の宗門の不在の手である、新進の先生方にお集りをいたゞきまして、この記念すべき新浄土宗のスタートに対し、御意見あるいは将来によせる期待をお伺いしたいと思います。

鈴木 まず、二つに分かれていた浄土宗が合同したということは、大変結構なことだと思います。だいたい、浄土とか、念仏思想と

いうものは、平安朝以前、もっと前からあったものと思われる。平安の貴族、或は鎌倉の貴族武士というのは、現世祈禱は真言、天台である。それからあの世は浄土の念仏でやるという風に割り切っていた。ところが、法然上人にあらわれて、浄土宗が独立しましたけれども、法然上人が亡くなってしまうと、浄土宗がいくつにも分派するんです。その理由は色々あると思うんですが、その一つに、教団の統卒者を誰れにするか、弟子を誰れにするかというようなことを、はっきりといわなかった。それで、多くの弟子が、自分こそ本當の教えをじぎくに受けた、自分こそ後継ぎだという意識が非常につよい。そのはっきりした例は、隆寛、証空、親鸞というような派ができたことです。それらの弟子が相承し伝えていくのですが、完全に分れてしまったものが、又勢力の強いものに統合されていくのです。それは一時的に決定的に統一されるのではなく、長い年月かかって統一されてゆく。統一されながら、その間に分れたり、といった経路をたどって統一されてゆくのです。

特集

司会 この分裂したものが統一されたとき、非常に教団は発展をとげるのでしょね。近世の歴史をみても、分派あるいは統一ということは激しいように思われますが、その間政治的圧力はいかがでしょう。

鈴木 そうですね。良忠門下は室町から近世にかけて統一されて来るのですが、江戸時

出席者

石上 善応 (大正大学助教授)

鈴木 成元 (大正大学講師)

石川 考之 (京浜女子大講師)

藤井 正雄 (大正大学大学院)

司会

浄土編集部

(宮林昭彦、佐藤行信、水谷哲雄、佐藤成順)

代になりますと、今度は政治の力で統一される。しかし、その政治力で統一された教団は簡単に団結したり、——全面的に統一されるところまでいかない。それが又、明治になって、圧迫を蒙って仏教教団は苦勞するわけですが、圧力が加われば加わる程力が強くなっていく。

このようにみてくると、分れる時と離れる時と、その力を比較すると、団結する時より分れる方が比重が重い。しかし、その分れたものが、両方とも真直ぐ進んで平行線をたどってゆくことは歴史的に不可能なんですね。結局、一つのものに戻ってくる。その一つに

もどった時、力は非常につよくなるのです。いま歴史的に見てきて、二つのものが一つに統一された時が一番教団が発展できる、この歴史的事実を思い合せて、仏教教団がもやもやしている時今後の浄土宗に寄せられる期待は大きいと思うんです。

藤井 僕が思うに、教団意識は鈴木さんの場合、歴史的に見ているんですが、歴史的にみると、例えば平安期には天台宗が非常に盛

んであった。そこに新しい鎌倉仏教が入りこんできた。そういうとき、教団意識が生れてくる。こう思うんですね。そういった分布を見てみますと、例えば浮土宗の場合、徳川と結びつくことによって勢力は伸長したけれども、逆に宗教自体の自由な活動が束縛されてきた。これはもう真宗でも同じことがいえると思うんです。真宗の場合、とくに連如の場合に、織田信長に対する石山本願寺の闘いです。あれによって非常に門徒宗が結束する。それによって新しい政権である豊臣・徳川と結びつくことによって、勢力をのばした。それはその宗教自体を、始めはその平民的庶民的であったものが、逆に貴族化されていく。そこに宗教の歴史というものが、ある権力と結びつくところに貴族化され、一応民衆から遊離していく傾向にある。

結局いわれることは、民衆と遊離したということがいわれる。例えば、キリスト教がどこにのびているかといった場合を考えた場合に、都市化、工業化の盛んなところ、家と家との紐帯の弛緩したところをねらっている。

例えば、昨年度のキリスト教から出版されたものをみると、人口移動が厳しいところほどキリスト教徒がふえている。そういったところをねらわなければならぬ。浄土宗も合併したのだから、今こそ現在に目をむけ、現在の動向をつかむ必要がある。

都市農村のどちらを狙うか

司会 お話を伺っていますと、それじゃ都市に力を入れたらいいのか、農村に力を入れたらいいのか、キリスト教は都市にという傾向がありますね。そうすると全般数からいって、農村に力を入れたら強いのか、都市といえ、ある程度インテリ階級になりますよね。そんなところを伺いたいのですが。

藤井 例えば寺院は全国平均によると、一三〇〇人に一つの寺院がある。面積からいって、十里四方に三軒ある。非常に多い。これが東京・大阪とか福岡とかいった都市をみると、地域的にみると

から対比して考えてみると非常に少ない。だいたい六〇〇〇人に一つくらい。

そうすると、結局東京の寺院という場合には機能が違ってきているんですね。農村の場合には一つのコミュニティ・センターの役割をはたしている。やはり農民の生活の中でのその総合的、お互に村と村、家と家といったものを結びつける割目をしている。だから逆に活動に成立する。都市の場合はそうではなく、関心の度合によって寺院との結びつきがみられる。そういった点で、農村と都市は別々の方向に進んでいかなければならない。同じその範疇で、こうしなくてはならないということではいけないですよ。都市なら都市としての機能、工業化もはげしく、人口移動は厳しいし、そういったところにおいては、これからの寺院は段々に向っていくか、或は、信者を獲得していくか。

鈴木 それはいつの時代でも考えられますね。

非常に寺院は密集しているが、逆に人口

藤井 農村の場合、次男三男は外にでていく。そういった問題を考えて、違うわけでは

鈴木 昔からよくいわれる、人をみて説法するということですね。

司会 そうすると、段々農村人口が減っていくと、地方の寺院はどうしたらいいのかというところが問題になりますね。都市の寺院は檀家が自然にふえていくのは当然ですね。

さて教学という面で、浄土教というものが非常に訓古学的になってきているとよくいわれる。ところがその域を脱していないのですが、この近世の浄土学なり浄土教学というものの、その歩んだ道にいうものは、一体どんな風に方向づけられているだろうか。

石上 教学が問題になると思うんです。教学、布教にいうことが今度の合同のキャッチフレーズになっているんですけれど、とくに近世の浄土宗学が停滞しているといわれるけれども、それがどういう風な方法をたどってきたのか、もし、いけないものならこれを改めなければならぬし。(次号へ続く)

扉の御法語

弥陀の本願をふかく信じて、念仏して往生をねがう人をば、弥陀仏よりはじめてまつりて、十方の諸仏菩薩、観音勢至無数の菩薩この人を圍繞して行住坐臥、よるひるをもきらはず、かげのごとくにそひて、もろもろの横悩をなす、悪鬼悪神のたよりをはらひのぞきたまひて、現世にはよこさまなるわづらひなく、安穩にして、命終の時は極楽世界へむかへ給ふ也。されば念仏を信じて往生をねがふ人は、ことさらに悪魔をはらはんために、よろづのほとけかみにいのりをもし、つつしみをもする事は、なじかあるべき。(浄土宗略抄)

浄土に往生するためには、念仏を唱えることが第一であると冒頭に記し、そして難行道と易行道のことを説き、三心や五種正行について詳しく述べられたものが浄土宗略抄であります。その終りの方に、ある人が「お念仏を唱えると、現世にどんな功德利益があるのでしょうか」と質問したので、上人は經典を用しながらお答えになっています。この回答

の一節が扉の御法語であります。本願を信じてお念仏を唱え、浄土に往生することを願いながら暮している姿こそ、一番優れたものであると判っているながら、いざとなるともって手近に、今ここで自分のものにできる目に見えた利益が欲しくなるのも、凡人の常なのでしょう。上人は詳しく説明されました。

即ち、ただの一声でもお念仏を唱える人があれば、過去のいかなる重罪といえどもたちまち滅します。また二十五菩薩やその他無数の仏菩薩がこられて、いついかなる場所においても常に行者を護って下さいます。その者が起きていても、寝ていても昼夜の別なく常に付きそって下さいます。従っていかなる悪鬼悪神も近よることができませんから禍がその人に及ぶことがないわけです。それなのに他の多くの神仏に祈ったり、もの忌みをしたたりして悪魔を払うが如きことは、どうしてあるべき筈がないではないか、と上人は強く否定されました。

そしてこの御法語に続いて、次のように申されています。人にはその人の宿業があるの

で、病気になる時には病気になったで止むを得ないのです。悪鬼悪神のために病気になるというものではないのです。もし神仏に祈ることによって病気が癒えるというならば、この世に病気になる人がなくなるであらうし、まして病気で死ぬ人があるわけがないということになります。ただしお念仏を唱える人には転重軽受といって、本来は重病となったかも知れぬものを軽い病気ですんだということがあります。このことを逆にいえば、これより重病になったかも知れないのに、阿弥陀さまのお力で、この程度ですんだと有難く思うべきなのであります。お念仏を唱えたおかげで病気が軽くなるというのではなく、この病気がすでに軽く済んでいると感謝するのがお念仏を唱える者の姿なのです。

病気を治療するために、お金を儲けるために神に祈るとしたら、形こそ似ていても信仰ではなく、ましてお念仏とは反対側にある姿というべきでしょう。最後に上人は「念仏申さんにすぎたる往生の義はあるまじき事にて候なり」と申されています。

浄土の会員を一人でも多く

- ◆どなたでも会員になれます。
- ◆会費は年額六〇〇円（送料共）です。
- ◆会員には毎月「浄土」を配布いたします。
- ◆この会員は皆様の会ですから、その発展の為にも一人でも多くの会員をつくって、正しい信仰運動をひろめましょう。
- ◆お知合いの方には是非おすすりめ下さい。
- ◆お申し込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都千代田区飯田町一―二一

法然上人鑽仰会

「浄土」講読規定

一部定価 金五十円

（送料 六円）

会費一力年 金六〇〇円

（送料 不要）

浄土 七月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十七年六月廿五日 印刷

昭和三十七年七月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿一

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四番

振替東京八二一八七番

伝通院本 木活字板 **大般若經解説** 新刊 堀口蘇山著

目次

○大般若經刊行願主立誓行誡、○大般若經木板刊行の企劃、○大般若經木板刊行總監細谷琳瑞、○琳瑞大般若經木活字板刊行企劃
○木板刊行企劃より木活字板刊行へ、○勝海舟大般若經刊行に賛意、○甚兵衛邸に於ける木活字板着手の下相談、○吹上御苑に於ける木活字寄進談、○木多村直寛木活字寄進、○甚兵衛邸に於ける木活字寄進の祝宴、○大般若經初摺慶祝会、○大般若經遅刊とその世相、○伝通院一山の炊煙と清浄心院摺写場、○俊光貫主大般若經刊行成就を祈願、○大般若經統刊の目処、○信の力は馬連を動かす、○大般若經摺写完成、○木活字板大般若經概観、○大般若經配本領収証、○伝通院本大般若經不伝の理由、△雜纂、○願海大般若經摺写場見学、○行誠願海を廻想、○琳瑞兜双厄と願海遁世、○般若十六善神祭（琳瑞初七日忌速夜追善会）、○琳瑞初七日忌と一切經刊行の言葉、○伝通院と西光院（徳本行者と蓮忍尼僧）、○大般若經扉絵筆者菊池容斎、○扉図及挿図解説。
△扉図三葉、挿図三十三図、悉皆根本資料、安養虎角製本型
以上

三百部限定版、伝通院本大般若經三百部梓行に因由。
摺写着手満一百年記念出版
頒価実費金七百円也。送料金百円也

東京都中野区野方町二ノ一五七四

芸苑巡礼社

電話(55)一三三八番
振替口座東京七八三四一番

日本一の生産・設備

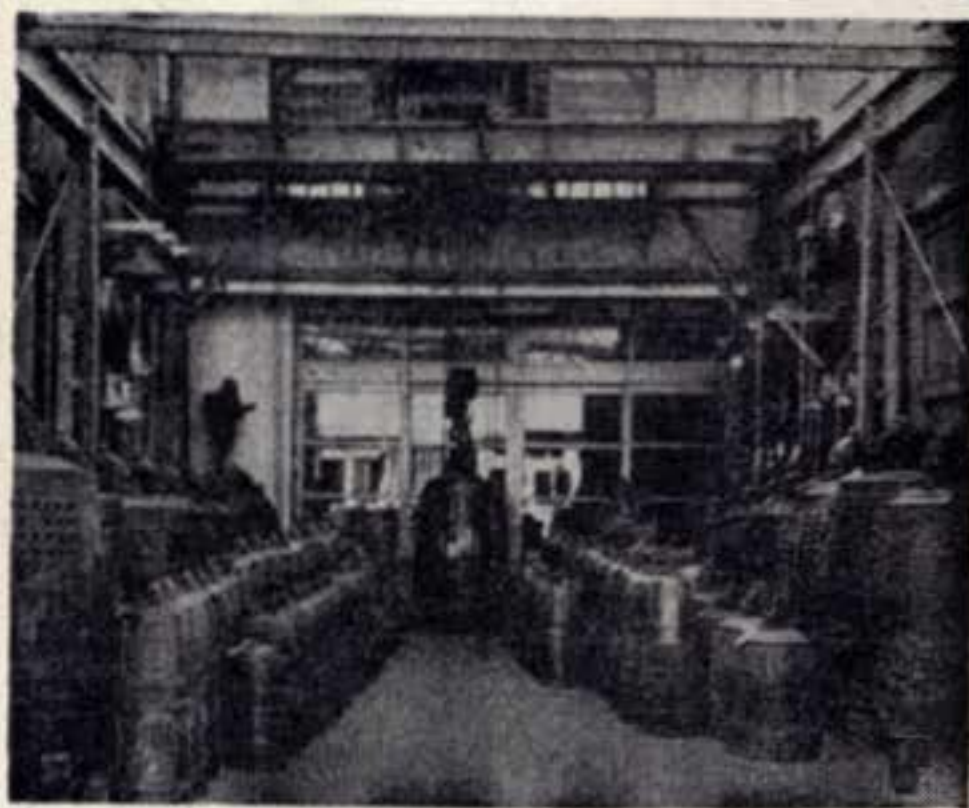
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響 響理 学 博 士 青 木 一 郎 先 生

梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田